

「胎児性水俣病と障害者」永本賢二 (胎児性水俣病患者)

プロフィール

1959 (昭和 34) 年 9 月 1 日 生まれ 水俣市梅戸

祖母、両親、姉 2 人 父：チッソ勤務

1965 (昭和 40) 年 熊本県水俣市立水俣第二小学校入学 (特殊学級)

1970 (昭和 45) 年 水俣病認定

1971 (昭和 46) 年 水俣市立水俣第二中学校入学 (特殊学級)

1974 (昭和 49) 年 熊本県立松橋養護学校 (現、熊本県立松橋支援学校) 入学  
(熊本県下益城郡松橋町南 (現、熊本県宇城市松橋町))

寮生活を送る。寮生活で徳富さんとの出会い

毎週バスで水俣市の家に帰っていた。

1977 (昭和 52) 年 熊本県水俣市の企業 (瓦屋) 就職

水俣福祉作業所 ほっとはうす

2002 (平成 14) 年 1 月 水俣市立水俣病資料館 語り部

2003 (平成 15) 年 5 月 水俣病慰霊式「祈りの言葉」水俣病患者・遺族代表を務める

2012 (平成 24) 年 5 月 水俣病慰霊式「祈りの言葉」水俣病患者・遺族代表を務める

2015 (平成 27) 若かった患者の会

現在「ほっとはうす」、「水俣病資料館語り部」、「若かった患者の会」で、様々な活動をしている

水俣病患者・遺族代表 「祈りの言葉」 平成24年5月1日

私は、昭和34年9月1日に、生まれました。水俣病の原因が工場排水にあるとチッソが気付いた時、水俣病が公式確認されて3年目です。

この事実を知った時、私より後から生まれてくる胎児性の仲間のためにも、タイムスリップしスーパーマンになって排水口を止めたかったです。

私の家では、昭和23年と24年に続けて兄が生まれました。2人ともすぐに亡くなり昭和27年と30年に姉が生まれました。そして、私は待望の男の子でした。

祖母は、バンザイ、バンザイと大喜びしてくれたそうです。でも、私の成長は2人の姉とは少し違っていました。痺れや痛みで泣いてばかりで、1歳になっても歩くことができずに

ずいぶん家族は心配しました。風呂上がりには姉達がマッサージしてくれたのを覚えています。

当時、病名も原因も不明とされていました。

父はチッソ工場の労働者で、昭和37年7月の安賃闘争を第一組合で闘いました。

父は、闘いの象徴でもある赤い鉢巻を私の頭に巻いて、拳をあげた「ガンバロー」のポーズをとらせてくれました。

ちょっと照れくさく、苦手でした。語り部の時に皆さんに見ていただく家の中で三輪車に乗った3歳ぐらいの私の写真がそれです。歩くことができなかった私に3輪車は車イスの代わりでした。

同じ、昭和37年、世界で初めて胎児性水俣病が確認され、私も、間もなく認定されました。それは、父が懸命になってチッソに訴えてくれたお陰と母に聞かされ、『お父さんありがとう』と、感謝の言葉が出ました。父は大好きな会社を訴えることが、とても辛かったと思います。

小学校5年で父は、亡くなりました。当時の父の思い出は、3交代の合間に船を持ち漁も大好きで、チッソも大好きで、働くことを誇りにしていました。私もチッソが大好きでした。クレーンや煙突の煙を見ると、チッソもがんばってるなど励まされました。

小学校でも、中学校でも 水俣病患者で障がいがあることで、いじめられました。その辛さを、チッソの風景が救ってくれました。今はクレーンもないし、残っているのはでっかい倉庫だけ。それを絶対なくしてほしい。心の中だけの梅戸港にしたいくないです。

これからのことを考える時、一番不安なのはいつ自分も車椅子生活になるのかなということです。先輩の胎児性患者も私より若い胎児性患者も、急激に車椅子になってしまいました。

今、埋め立て地のお地蔵さんまで訓練だと思って歩いていますが、いつまでもずっと歩きたいです。

まだまだ水俣病は終わっていません。苦しんでいる患者さんたちを救えないのかなと思います。患者さん達もがんばってほしいし、チッソや国や県はどうするのか、終わらしてはいけません。

終わってない水俣病患者の気持ちを本当にわかってほしい。

車椅子の人たちの気持ちをチッソの人たちはわかってほしい。

ちゃんと水俣の子どもたちには「水俣出身です」って言ってほしい。9月に子どもたちが語り部を聞いてくれた時、誕生日だったので、校歌をこどもたちが歌ってくれてうれしかったです。

昨年3月11日、東日本大震災で多くの生命が奪われ、津波に襲われた町や村が一瞬のうちにメチャクチャにされた光景をテレビから見せていただき心が痛みました。子ども達のことを考えると、水俣病に苦しんだ小さい頃と重なって涙が止まりませんでした。

ほっとはうすの仲間と去年の水俣病を伝える活動の中で、福島原子力発電所の放射能から子どもを守るため九州に避難をしているお母さん達、放射能を計測し、必死で子どもたちを守ろうとしているお父さんにも出会いました。改めて、水俣と福島のつながりを考え、水俣病事件の教訓が、少しも学ばれていないことを知りました。

子ども達を放射能から守るためにも、水俣病を伝える活動を続けていきたいです。そのことが、水俣病で犠牲になった多くの生命を無駄にさせないことです。

今あらためて、そのことをお誓いし、東日本大震災で奪われた人間だけでなく、小さな生命たち、魚、虫、鳥、すべての失われた生命の御冥福をお祈りいたします。最後に、水俣病で奪われた全ての生命に哀悼の誠をささげ、心より御冥福をお祈りいたします。